

---

# ツエル万屋（よろずや）女の恋の行方

淡雪ぼたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツィエル万屋女ちんごの恋の行方

### 【Nコード】

N7008W

### 【作者名】

淡雪ぼたん

### 【あらすじ】

地味で目立たなくて、とっても太ってて、婚期も逃し27歳。ついたあだ名が『ツィエル万屋女』。恋にも、仕事にも、負け犬・・・。そんな彼女の幸せさがし。

## 第1話 私はツィエル万屋（よろずや）女

女にとって独身27歳って凄く微妙な年齢だよな．．．。

仕事バリバリ出来て、ある程度のポストに就いてて、男性社員と対等に渡り合つて、部下の信望も厚く、デキる女だったらいいけど．．．。

後から入って来た後輩にあつという間に追い越されて、未だにお茶くみ雑用、コピー取りに電話番号じゃ．．．。

毎日、回りの社員達の冷やかな視線に耐え、上司の顔色を伺い．．．  
．このご時世．．．合理化でいつ肩たたきにあうかなと内心ビクツキながら脅えてて、皆から頼まれる雑用に埋もれ毎日残業．．．残業で．．．。更に最悪なのは、私ばかりやたらと残業が多いので上司からは大目玉．．．。

「なんで篠崎君（シノザキ）だけ飛び抜けて残業時間が多いんだね．．．。君は何年この会社に居るんだ？もっと効率良くスピーディーに仕事をこなす工夫をしようとか、そう言った気持ちはないのかね？」

「はい．．．あの．．．でも．．．。定時で上がるうと思つ頃に、色々山のように皆から仕事が回ってきてしまうので．．．。残業せざる終えない状況になってしまいました．．．。」

「何だね！！君は人のせいにするのかね？」

「いいえ．．．。そう言うつもりではありませんが．．．。」

「今、確かに『皆が』．．．と言ったじゃないか．．．。」

ガミガミ叱られる中、篠崎宙美（シノザキ）は心の中で『ハアッ』と溜息をつ

いた。

「はあくしまった．．．。嵐田課長のお説教は長いんだよね．．．。

嵐田課長は完璧、私をストレス解消のはけ口にしてるとしか思えない．．．。

大体、部長から何か小言を言われたり、部下がとんでもないミスをしでかして、一緒に尻拭いをしなくてはいけない状況とか、色々仕事で上手いかなかったり、家庭で何かあったのか？ただ機嫌が悪かったりでも当たり散らすのよね．．．。ああ．．．これだと益々残業時間が増えて帰宅時間が遅くなりそうだわ．．．。

「．．．分かったかね．．．」

「あ．．．はい．．．申し訳ございませんでした。以後気をつけます．．．」

（言いたい事は山ほどある．．．だけど．．．言っても無駄だって事はもう十分分かってるし．．．。本当はそうやって私の事をイビってストレス解消してるんじゃないですか？とも強く感じてる。くやしい．．．ほんとうに悔しいけれど．．．。優秀な社員じゃないって事も分かってるし。27歳．．．この年齢でクビになったら新しい就職先を見つけるのは難しい．．．。

パートやアルバイトはあっても正社員としてはとても難しいだろう．．．。特に資格も特技も無いし、転職の自信も無いし．．．。やっぱり我慢しないと．．．。

やっと嵐田課長のねちっこいお説教から解放されると思ってホッとした時だった．．．。

「全く．．．君は結婚はまだまだ無さそうだし．．．仕事もこれと言って出来る訳でも無いし．．．。君程度の仕事だと、パートやアルバイトでも十分賄えるし．．．。こう言う不景気のご時世だ、いつ

クビを切られるかも分からないという危機感もなくはないし。この先の身の振り方も真剣に考えておいた方がいいんじゃないかね？」

「はい．．．」

シヨックだった．．．。合理化とか、人員整理とか、黒い噂は耳に入ってきていたけれど、その対象に自分が入ってる可能性が大きいと強く感じた。生活もかかっているし簡単に辞める訳には行かない．．．。

気の利いたお世辞を言うのも苦手だし、世渡りも下手だし、社交的じゃないし．．．。だけど一生懸命頑張ってるのに．．．。私の努力は全く認められない．．．。

「篠崎君ね．．．回りの女子社員がどんどん結婚して寿退社していくのに焦らないの？ 女の幸せは結婚でしょう？ そう言うのは諦めてるの？」

「い．．．いいえ．．．そう言うわけではありませんが．．．」

「まあ．．．それじゃあねえ．．．」  
そう言って嵐田課長が舐めるように見下すように、繁々と宙美を見た。

「少しはダイエットして、自分を磨いたらどうかね？ 君の為を思っってはつきり言うけどね、それじゃあ男は誰も寄ってこないよ。迫られたら逃げていくよ．．．」

．．．．今日の嵐田課長の言葉は強烈だった．．．心の深く突き刺さった．．．。

確かに私太ってます．．．ツェル女です。だけどこんな皆のいる所で言わなくなってる．．．。

その言葉はセクハラじゃありませんか？ 言って良い事と悪い事がある

りますよ。

今にも泣き出しそうな宙美の顔を見て、慌てて嵐田課長が話しを終わらせた。

「ま．．．まあ、頑張ってくれたまえ．．．」  
そう言つて、慌てて目を書類に落とし仕事をし始めた．．．。

「失礼します．．．」

それから慌ててトイレに駆け込んで、洋式トイレの個室の便器に腰かけて、声を殺してハンカチを目に当てて泣いた．．．。

可愛らしい新人の女子社員だったら、皆の前で泣いても見れるけど、ベテラン年齢の27歳のツィエルの女子社員が泣いたら見れたものじゃない．．．。

分かつてる．．．太つて、ダサくて、野暮つたくて、男にモテなくて、皆からウザがられてる事だつて．．．。

だけど．．．仕事頑張ってるのに．．．。皆の分も．．．どんな仕事でも、文句も言わずに頑張ってるのに．．．。

誰も．．．私の事なんか．．．見向きもしないし、うつとおしい存在なのね．．．。

．．．その時だつた．．．。女子社員が2人トイレに入つて来た。

「ねえ、有里花ゆりかの新色の口紅可愛いね」

「うふふ．．．。シャネロンの秋の新色なの．．．。使ってみる？」

「わあ．．．ありがとう．．．。綺麗な色．．．私も買おうかなあ」

（そろそろ仕事に戻らないと思つていたのに．．．。ここから出

れなくなっちゃった!」)

宙美は仕方ないので、彼女達が出ていくまでの間、息を殺してトイレの個室に籠っている事にした。

(あの声は．．．同じフロアの上条有里花かみじょう ゆりかと草刈麻美くさかり あさみだわ．．．。早く出て行かないかしら．．．)

「ねえねえ．．．そう言えばさあ．．．。また怒られてたね．．．」

「ああ．．．。ツエル万屋よろいせやさん?」

「そうそう．．．。今度の合理化に絶対名前が入ってるよね」

「の、可能性大きいよね。でもさー。クビになってもあの年齢で、あの体形で、仕事もそこそこでしょ．．．。ヤバイよね．．．」

「うんうん．．．。絶対にヤバイ．．．。このままだと、仕事なし、結婚も出来ないし、生活に困ってさあ〜橋の下の段ボール生活とか．．．」

「うわあ〜悲惨．．．。私達はそうならないように、婚活頑張ろうね!」

「うんうん。女23歳．．．焦らないと、ツエル万屋さんみたいになったら悲惨よね」

「うんうん．．．。だから．．．。今日はノー残業デーだし．．．。男子社員誘って飲み会に行きましょう」

「うんうん．．．。行く行く．．．」

「そろそろ戻らないと、嵐田課長に大目玉だわね．．．」

「そうね．．．」

2人が女子トイレから出ていった後やっと、宙美は個室から出られた。

「はあ．．．。足が．．．痺れた．．．」

さつき彼女達が言っていた言葉が頭の中を駆け巡った。

悔しかった．．．。凄く悔しかったけれど、何も言い返せない自分．．．。

洗面台の鏡に映る自分の顔を見たら、目が赤く充血してた．．．。

「さつき．．．泣いたから．．．。目もはれぼつたい．．．」

慌てて顔を洗って、ハンカチで拭いて、気を取り直してトイレから出た．．．。

．．．．そう．．．。私は太ってる．．．。LLサイズの服が、ヘタしたらXLサイズの服しかはまらない．．．。

スーツのサイズは17号．．．。カタロク通販やネット通販で買ってる。

お尻が大きいし、足は太くて桜島大根．．．。二の腕もムッチリプルプル．．．お腹も大きいし妊婦みたい。背中の贅肉も段々になつてて．．．。顎も二重になりかけ．．．。

食べる事は好きだけれど、バカみたいに食べてるわけじゃない．．．。

体の代謝がとても悪いし、運動は苦手．．．。それからストレスを貯めやすく、ストレスがたまると甘い物が欲しくなる．．．。

地味で控え目な性格で、ノーと言えずに皆の雑用ばかりやっていて、気がつけば『ツイーエル万屋さん』と陰で呼ばれるようになった。

．．．．そう．．．。私はツイーエル万屋女と呼ばれる、恋にも、仕



事にも、負け犬の孤独な女・・・。

(第2話に続く)

第1話 私はツイーエル万屋（よろずや）女（後書き）

（作者より）

主人公と私って似てるんですね・・・。

自戒の念を込めて・・・そして、頑張れ！と応援の意味を込めて書いております。（ハート）

翻弄されやすく、凹みやすく、筆が止まってしまう事が度々。

無の境地で自由気ままに書き終えたく、感想は、完結を迎えてから受け付けとさせて頂きます事をご了承下さい。m（）（）m

## 第2話 素敵な部長さん現わる

――あれから大幅に組織改革と人事異動が行なわれる事となった。

人事異動には、外部からスカウトしてきた人材も含め、有能な人材を各部署に配属。各職場の職制もガラリと入れ替わる事になった。人員削減前の肩叩きという雰囲気而降格・左遷の辞令も容赦なく行なわれ、希望退職の応募も始まった。

債務超過、営業利益赤字と、今回の人員削減の責任を負って、会社トップも交代となる事も決まった。

朝の合同朝礼で、社長から今回の大幅な組織改革と人事異動の件についての説明が行われた後、各部署にて本部長から細かな説明と辞令、対象者への上司からの呼びだし、個別面談が行なわれた。

なんとか対象者から外れホッと一息ついて、宙美がコンピューター及び周辺機器の保守点検に訪れているカスタマエンジニアの技術員さんに出すお茶の準備をしようと給湯室に入ろうとした時だった。給湯室隅で、ダベリングする同じフロアの上条有里花と草刈麻美の声が聞えて来た。

「嵐田課長が左遷とはね〜」

「うんうん・・・。驚いた・・・。お気の毒にね・・・。」

「まあ、いつも暇そうに職場を見回ってて、仕事やってんのか？って感じだったし、感情にムラがありすぎて上に立つような人材じゃないなって思ってたし・・・。ただ上司へのゴマスリが上手いって感じだけの人だったものね」

「まあね．．．」

「そう言えばさ、ツール万屋さんが対象者に入ってたのは意外だったわ」

「ほんとよね．．．。私達と比べて会社の在籍期間は遥かに長いじゃない？　もしかしたら上層部にコネを回せられるような人が存在したりして．．．」

「え〜つなにそれ。愛人って事？」

「そんな感じ．．．。だって．．．あんな人がずっと会社に留まってるって事がおかしくない？」

「まあそれはちょっと変だなんて思うけど．．．でもあの器量にあの体形だよ．．．それはありえないでしょう？」

「分からないわよ〜。そう言う趣味の人だって稀にいるじゃない？」

「エ〜ツ．．．。」でぶ専”って事？」

「そうそう．．．」

．．．．．宙美はものすごくショックだった．．．。

『でぶ専』何なのそれは．．．。酷い！！酷すぎる．．．。今まで我慢して来たけれど．．．許せない．．．。

『きゃはははっ！！』と笑いあう嘲笑の音が聞えて来て、宙美は心の中が真っ黒な雲で覆われた。

あの子達．．．。会社に入った頃は『篠崎センパイ．．．篠崎セン

パイ』ってすごく懐いて、お愛想使って腰も低かったのに．．．。入った頃は可愛いなって思ってたけれど．．．。電話は取らないし、お茶も入れないし．．．。一度やんわり注意したら態度が豹変して．．．。

そして1年が過ぎた頃知ってしまった．．．。私の事を『ツール万屋女』ってあだ名を付けて酷い事を言ってるのを．．．。

それに同調していく人も増えていき．．．。強く言えない性格もあって我慢し続けていたら、状況はもつと悪化．．．。いつの間にか便利屋として、皆から雑用を頼まれるようになってしまった．．．。

嵐田課長だつてあの人達と同類だ．．．。部長も見てみぬふり．．．。

年配の男性社員さん達は、変わらず接してくれるし、時々若い子達に注意もしてくれるけれど．．．。

1番悪いのは私なのかもしれない．．．。面と向かって間違ってるって指摘出来ないで我慢して耐えてきて．．．。こう言う状況になるように自分自身で作ってきてしまっていたのかもしれない．．．。

給湯室入り口扉前の通路に呆然と立ちつくしていた宙美は、手にグツと力を入れ握りしめ、平然とした顔をして扉を開けて給湯室に入って行く決心をした。

こんな事ぐらいで負けない．．．。怯まないわ．．．。

一歩足を前に踏みだそうとした時だった．．．。通路反対側からスツと給湯室のドアを開けて背の高い男性が中に入って行った。

「ちよつと．．．君達、今日合同朝礼で会社の現状とか、希望退職や人事の話し等聞いただろう．．．。なのに何でこんな所でサボってるんだ！！左遷されたいのか？」

有里花と麻美はいきなりの事に2人して飛び上がって目が点状態で固まっていた。

「あ．．．あの．．．あなたは．．．」

有里花が強ばった笑顔で聞いた。

「あゝ申し遅れたが、私は今度この企画開発部の部長になる尾崎諭おなき さとるだ．．．。宜しく頼む」

「は．．．はい．．．。よろしくお願い致します」

尾崎は有里花と麻美の胸元のネームプレートを見て「上条有里花さんと草刈麻美さんだね．．．。早く仕事に戻らないと、評価減点するよ。人事の対象者に加えようか？」ギツと恐そうな表情をして睨みつけた。

「は．．．すみません。今すぐに戻ります」

「す．．．すみません」

有里花と麻美は猛スピードで自分のデスクに戻った。

尾崎はそれから宙美に目を移してネームプレートをジッと見た。

「篠崎宙美さん．．．だね？」

「は．．．はい。あの．．．私は、保守点検に来ているカスタマーエンジニアさんにお茶をと思ひまして．．．」  
慌てて吃りながら返事をした。

「ついでに私にも入れて貰ってもいいかな？」

「あ．．．はい。入れたらお持ちしますの．．．。どちらのデス

クにお持ちすればよろしいでしょうか？」

「ん〜。じゃあ、高崎部長と業務引き継ぎの打ち合わせもあるし、2人分ミーティングルームをお願いできるかな？」

「はい。かしこまりました」

宙美は今度の本部長は、凄く若い・・・と驚いた。

私と同じぐらいか・・・少し上ぐらいかしら？ 背が高くて緩やかな天然がかった髪をナチュラルショートにして、整った綺麗な顔立ち・・・すごくセンスのいい高級そうなスーツを着こなして・・・。とっても素敵だけど左手薬指に指輪が光ってる・・・。ご結婚されてるのですね。

こんな素敵な人ですもの・・・当たり前ですよね・・・。

こんな素敵な人の奥さんって・・・モデルさんや女優さんのように綺麗で素敵な人かな？

宙美はコーヒーを入れながら、新しい素敵な尾崎部長の事をあれこれと想像した・・・。

(第3話に続く)

### 第3話 しあわせの予感

ドアをノックして、ミーティングルームにコーヒーを持っていったら、尾崎部長は高崎部長と資料を広げながら、真剣な顔で話合っていた。

( 真剣な顔も素敵 . . . )

尾崎は宙美に気がいたら、真剣な硬い表情が一転優しい笑顔に変わった。

「やあ . . . すまなかったね。どうもありがとう」

宙美もにっこり笑って軽く会釈する。

資料が汚れないように、少し離してコーヒーを置いた。

「いい香りがするね . . . 良い豆を使ってるのかな？」

尾崎部長がコーヒーカップを持って香りを嗅いでから、ひとくち口に入れた。

「あ . . . いいえ . . . 。 200g 398円の豆なんです . . . 」

「え . . . 。 その値段で、この味?! もっと高い豆にも引けを取らないぐらいいい味だね」

「はい . . . 。 ビーンズ&ビーンズと言うコーヒーショップでいつも買ってますが、そこで自家焙煎された店長オススメのオリジナル品です」



尾崎部長の嬉しそうな顔を見て、高崎部長も嬉しそうな顔をして言った。

「コーヒだけじゃなくて、篠崎君の入れてくれるお茶はどれも美味しく、来客さんたちにも好評なんですよ」

尾崎部長が宙美を見ながら嬉しそうに微笑んだ。

普段あまり注目されないし、空気のような扱いなので、宙美はドキマギした……。

「あの……ではこれで、失礼します」

「あ……ちょっと待って」

「はい？」

「ちょっと座って」

「は……はい……」

内心ヤバイ……。何か怒られる事をしたかなと宙美は頭の中で自分の行動を思い起こし整理整頓し始めた。

「篠崎君の業務日誌を見せてもらったけど、もの凄い量の仕事をこなしてるね。休日出勤や残業時間も一人だけ飛び抜けて膨大な時間についてるし」

さっきの柔らかな表情とは一転、尾崎部長の真剣顔に、宙美は緊張感が走った。

「はい……。色々仕事が舞い込んでしまいました……」

「この事について、見過ごして来てしまったのは悪かったね」

「はい．．．申し訳ございません」

宙美は怒られたっ！と思つて、とりあえず謝つておこうと思つた．．．。

「いや．．．。私の方が謝つてるんだけど．．．」

「えっ？」

「本来の業務以外に、他の若い子達の業務まで押し付けてしまって、3人以上の仕事をこなしてるじゃないか。それ以外に、コピーや電話取り次ぎ、お茶出し、備品の管理など、その他諸々の雑用まで全部篠崎君に任せてしまつて．．．。よく過労死しなかつたね．．．。こつ言つ状況を見過ごしてきてしまつたのは、上に立つ者の責任だよ。聞けば課長から残業時間が多い事で始終叱られてたらしいね．．．。業務内容も把握しないで、その事ばかり取り上げて．．．。この業務内容だつたら休出や残業せざるを得ない状況だつたと思うよ」

「はあ．．．」

尾崎部長の意外な反応に、宙美は驚いた。

「高崎君。この事に気付かずに来てしまつたのは君の責任も大きいよ」

「はい．．．。本当に申し訳ありませんでした」

宙美は驚いた．．．。高崎部長がどうみても自分よりも遙かに年下の尾崎部長に怒られて、ペコペコ頭を下げる．．．。信じられない．．．。

今までは、嵐田課長と一緒になつて、叱つて来たり、この事で評価

も最低ランク扱いで万年ヒラ状態だったのに．．．。  
宙美は突然大口の宝くじに当たったような気持ちになって、頭の上で祝福のファンファーレが鳴ってるような気持ちになった。

「それに．．．。他の部下から聞いたが、あの使えない女子社員2人から、色々大変な目にあってたみたいだね。陰口叩かれたり．．．就業時間間際に放置していた彼女達の仕事も回されたり．．．」

宙美は心に深く突き刺さっていた大骨を、優しく引き抜いてもらったような気持ちになり、それから突然噴水のように目から涙が溢れた。

今まで必死に気を張って自分自身を励まし続け、意地の壁を張って耐え忍んできた．．．。その壁が音を立てて崩れ去り、素の弱い自分が現れてしまった。

「す．．．すみません」

宙美は慌ててハンカチで目を押さえて、グツとお腹に力を入れて、必死で涙を止めた。

（こんな所で泣いちゃ．．．新入社員じゃあるまいし．．．恥ずかしいすぎる．．．）

「辛かったね．．．」

その尾崎部長の一言に、決死の覚悟で押さえ込んだ涙の栓が、ポポーンと吹き飛び、大洪水の涙が押し寄せてきてしまった。

『うわああああーっ。』これは不味すぎる．．．。  
慌ててハンカチで目をグツと押さえた。  
焦って慌てて涙腺に蓋を試みた。

「部長の前で、すみません」

「大丈夫かい？　ここには私と高崎君しかいないし、遠慮しなくてもいいんだよ。凄く辛かったと思うよ。聞けば今まで何度か君から相談のような形で課長を通して現状を訴えていたそうだね。逆に責められて．．．とても辛かったと思うよ」

『だーかーらー。その言葉言わないで下さいっ！涙腺を刺激しますっ！』

宙美はそう思ったら、なんだかおかしくなってきた、お陰様で涙腺の栓がきっちり閉まった。

「すみませんでした。もう大丈夫です。私も言われるがまま、業務が立込んでから無理だとハッキリ断るといふ事も出来ず、何でも請け負ってしまったのが悪かったと思ってます」

「いやあー。篠崎さんは本当にいい人だね．．．。素晴らしい！満面の笑顔を向けられて、宙美はクラツと眩暈がした。

(こ．．．この笑顔．．．眩しすぎます．．．。私には、レベルが高すぎますっ．．．)

「現状は良く分かったから、これからは私が、このような事が起きない様に目を光らせて注意するから、安心して本来の自分の業務の方を頑張るよう、よろしくお願いしますね。無用な残業や休出にもならないように改善させますから」

「あ．．．。ありがとうございます」

「あ．．．でもお茶はこれからも篠崎さんをお願いしてもいいかな？　とても美味しいし、業者さんや来客の方にも好評らしい．．．」

「はい．．．大丈夫です」

うわぁー。なんて爽かで素敵な部長さんだろう．．．。  
もちろんご結婚されてるようだし、こんな私なんか眼中に無いだろ  
うし、ただ憧れの部長さんって言うか．．．心のオアシスって言う  
か．．．。なんだか仕事に張り合いが出たって言うか．．．。世界  
が薔薇色に見えて来たわ．．．。

後で分かったが、高崎部長は降格され課長となり、その上が尾崎部  
長となった．．．。

尾崎部長は後で分かったが、私よりも3歳年上の30歳．．．。こ  
の年齢で部長抜擢なんて、年功序列的なうちの社では異例中の異例  
だ．．．。

新しい社長の、優秀な人材は年に関係なくどんどんと重要ポストに  
抜擢する考えからこの様な人事となったようだ。

尾崎部長は、新社長自らヘッドハンティングして、頼み込んでうち  
の社に来て貰ったらしいとの噂も耳にした。

詳しい事はまだ良く分からないが．．．かなり優秀な人のようだ．．．。

明日から、尾崎部長率いる新しい企画開発部が発足する．．．。  
ちよっぴり楽しみのような．．．ワクワクする気持ちでした。

(第4話に続く)



### 第3話 しあわせの予感（後書き）

『ビーンズ&ビーンズ』と言うコーヒーショップは実在しません。

m ( ) m

因みに私のお気に入り、カルディのマイルドカルディです。（八

ート）

#### 第4話 最悪のハプニングとツイエルの憂鬱

-----尾崎新部長率いる、新生企画開発部がスタートした。

企画開発部のフロアはオフィスビルの15階。

フロアの中央・・・社員全員を見渡せる一番大きな立派なデスクが尾崎部長の席。

部長の背後は一面大きな総ガラス張りで、東京の大パノラマが広がる。その窓から見える景色は、手前側は少し大きめの公園で、鮮やかな緑の木々と、四季折々咲く美しい花々が素晴らしく、湧水を利用した人工池や、子供の水遊び場や遊具、野外ステージ、小さな美術館、近隣の高層マンションに住む住人の為のコミュニティセンターなどがあり、人々の憩いの場となっている。

その先にはビル群が広がり、遙か遠くにスカイツリーが見える。

夜はビル群の明かりが銀河のように広がり、夜景も美しい・・・。

尾崎部長のデスクの前に少し広めのスペースを空けて、横向きに向かい合わせに2列ずつ川の字のように社員の机が並び・・・部長のデスクの真正面辺りに高崎課長のデスクと向かい合わせて宙美のデスク。宙美は部長と課長に一番近い席となった・・・。

今までは、窓際族のように、一番外れの給湯室に近い、窓から遠く離れた陽の当たらないような、書類の沢山詰まったロッカーが背後に山のごとくそびえるように立ち並び、暗くうすぐらい一番居心地の悪そうな席だった。

そして宙美のデスクの隣は、空席。その机の上に有里花や麻美、それに同調するような若手男子社員達が容赦なく、当然の様に次から次と仕事を置いていき・・・。いつも書類で溢れ変えってるような有様だった。

今は社員に不公平が起きない様に、また、仕事をスムーズに勧められるようにデスクやロッカーも配置替えされ、明るい雰囲気の良い



職場に変化した。

申し遅れたが、宙美の働いている会社は中堅電気メーカーで、オーディオと周辺機器、液晶テレビ、携帯電話、携帯型デジタル音楽プレイヤー、ゲーム機器等が社の主となる製品だ。

今回の赤字経営となってしまった原因は、地デジ化で液晶テレビの売上が伸びる事をかなり早い時期から察知していたのにも関わらず、開発が遅れてしまった事。それに合わせて、DVDの開発もひと足遅れてしまった。

大手数社のBDブルーレイかHD DVDかの企画争いに翻弄されて、どちらの企画を採用するか決断がつかずかなり出遅れてしまった。

それから慌てて開発した結果、ブルーレイに不具合が見つかり、リコールとなり、無償部品交換手直しとなってしまう、会社の信頼も大きく失墜して窮地に追い込まれてしまった。

これらの事によって、大きな目玉二つの売上が伸びず、今回のような状況に陥ってしまった。

宙美の在籍する企画開発部の業務内容は、新しい商品を自社開発、外部大手企業から限定品として販売の商品依頼を受けて開発したりの研究開発グループ、製品のマニュアルグループ、設計からあがってくる図面に基づきデータ作成するCADグループ、安全規格グループ、部品管理グループと、様々な業務内容を総括する部署だ。宙美は元々はCADグループに所属していたが、庶務の女子社員が寿退職する事になり、宙美が庶務に回され、その後任として有里花と麻美が配属された。

宙美もそろそろ結婚適齢期……。それ程複雑ではない職務内容の庶務なら、突然寿退職されても後任が比較的早く見つかる職種という意図もあった。

そんなわけで、庶務は、皆の雑用係のように思われ、下に見られ、

大人しく何でも我慢してしまう宙美の性格もあって、いつの間にか万屋ちんぽや的な存在になってしまった。

CAD経験者と言う事で、設計から大量の仕事依頼があつて手の足りない時には、CADにも駆り出され．．．。

庶務の通常業務があるのでCADまでは手が回らない旨を上司に話したが、逆に仕事を上手にやりくりするのがベテラン年数ここで働いている物の務めだろうと叱責され、CADは自分の業務を終らせた後、残業や時には休日出勤で賄ってきた。

CADグループのグループ長もそんな状況を見かねて課長や部長に何度も話してくれて、もう少し人数を増やして欲しいと掛け合ったりもしたが、全く相手にされずにきてしまった。

有里花と麻美は団結し、CAD若手男子社員も巻き込んで、グループ長を口で負かすほどの状況で、殆ど定時で帰ってしまう為に、急ぎの仕事で困った設計者の方もつい甘えて宙美に仕事を頼んでしまっていた。

元直属の上司であつたグループ長の奥さんは、病気で他界し、男手ひとつで残された子供達の面倒を見ると言う家庭の事情を抱えていた。

宙美にはそんなグループ長を放っておく事も出来ず、我慢して仕事を手伝ってきた。

あれからCADスタッフも増員し、宙美も本来の自分の業務に集中出来る環境になった。

有里花と麻美は、ヘルパーとして自社製品の売り込みに、各電器店にヘルパーとして出向中だ。彼女達に同調した男子社員達も出向対象となった。

自分の業務をキチンとこなさないと、リストラ対象名簿に加わる可能性もあるような、ちょっとした警告のような、肩叩きのような意味の含みもあるようだ。

大手電器店にヘルパー出向の辞令をもらった2人は、真つ青状態だった。。。

\* \* \* \* \*

多忙な尾崎部長は、精力的に忙しく動き回り、時には出張で不在だったり、会議で席を外している時間も多い。

それでも自分のデスクで長時間仕事をしている事もある。

今までは、陽の当たらない一番末の席で仕事をしていた宙美には、明るい環境で、部長と課長のすぐ近くでの仕事は何となく落ち着かなくて、緊張する。

時々何となく視線を感じ、チラツと見るとパシツと部長と目が合う事がある、心臓が凍りつくような．．．椅子から1mぐらい飛び上がったしまいそんな気持ちになった。

こう言った素振りには、何となく意味深な様にも取られそうだ．．．ご結婚されてるのに．．．ご迷惑にもなる．．．宙美は部長の存在を掻き消して、必要最低限以外見ない事にした。視線を感じても無視．．．視界の枠に入っても絶対に見ない事にした。

そうやって1ヶ月が過ぎ、最近はあまり意識せずに、自然体で仕事もスムーズに捗るようになって来た頃だった．．．  
．．．最高に恥ずかしい事件が起こった．．．

設計からCADに依頼した図面資料が紛失の騒ぎに．．．かなり複雑なデータだったので、早めにと部長交代以前からCADに依頼していた資料だった．．．

尾崎部長が日程調整と、業務状況を調べている中で、図面紛失がわかった。

今、ヘルパーに出向中の有里花が初めに請け負った仕事で、引き継ぎ担当した男性社員に引き渡したと言い張るが、その社員は全く連絡を受けてないと、「受けてない」「受けた」「引き渡した」「貰ってない」の堂々巡りとなってしまう、とり合えず、手の空いている社員一同で、紛失した資料の搜索が始まった。

その凶面は、大手スーパーの目玉として依頼を受けたBD内臓液晶テレビで、納期を遅らせるわけにも行かない、重要な凶面だった。。。

本来こう言う重要な物は、もっとベテランのオペレーターに回すのだが、今回は、自社ブランドの新商品と重なり、やむを得ず、有里花が担当となった。

机の引き出しの中から、ファイルロッカーから。。。宙美も懸命に捜した。

そして。。。扉が錆びていて開きにくいファイルロッカーを、一生懸命ガタガタ引っ張って開けようとした時だった。。。

無造作にロッカーの上に積み上げられていた分厚いファイルが雪崩を起こし、宙美の頭上に降り注いできて、ドカドカと頭に直撃した。

。。。目から星が出た。。。

目の前が暗くなったのは一瞬だったと思う。。。

その場にペタンと尻餅をついて座り込んでいる宙美を見た、回りの社員が、一斉に、青ざめた顔をした。。。

。。。凄く恥ずかしい。。。

そんなに青ざめるくらい私。。。目立った？

何でそんなに。。。化け物でも見たような顔で。。。何で皆一斉

に見てるの？  
そんなに私．．．ぶざまだった？

「大丈夫か?!」

真っ先に駆けつけてくれたのが、尾崎部長だった．．．。  
いつもは穏やかな顔が、非常に驚いて目が点のような顔をしてる．．．。

初めて部長のそんな顔を見た．．．。

「おい．．．救急車呼んでくれ!!」

「いえ!!そんな呼ばなくても大丈夫です．．．!!」  
救急車だなんて恥ずかしすぎる．．．。

「目の上が凄く腫れてるし、病院に行つた方がいいよ」

「えっ?」

だから皆青ざめた顔を?!言われて見たら目の上がジンジンして痛い．．．。

「でも．．．救急車まで呼ばなくても．．．。自分で病院に行けますから．．．。こんな大変な時に、皆さんにお手間取らせてしまつてすみません。大丈夫ですので．．．。」

「じゃあ私が付き添おう．．．。」

「いえ．．．私一人で行けますので．．．。お忙しい部長のお手間を取らせたくありませんから．．．。」

部長と一緒に病院なんて．．．勘弁です．．．。恥ずかしすぎます．．．。

「私の事は気にしなくて大丈夫だから遠慮しないで．．．。立てる

か？」

「はい！大丈夫です．．．」

元気に立ち上がって、何でも無い姿を見せたら、そんなに心配するほどじゃないと分かって貰えるかなと、気丈に振る舞ったが、なんだかヨロヨロしてしまう自分．．．。凄く恥ずかしかった．．．。

「ほら．．．。よろついでるじゃないか．．．一緒に病院に行こう」

そして部長はタオルに包んだ氷袋を渡してくれ額に当ててくれた。

その心配そうな表情．．．。反則です．．．。萌え度高いです．．．。得点高すぎます．．．。

「あ．．．自分で出来ますから．．．」

ちよつと氷袋をむしり取るように、受け取った．．．。

「大丈夫か？」

「は．．．はい．．．。あの、本当にすみません」

それから部長の号令で体格の良い若手男子社員4人に声をかけ、2人ずつ向かい合わせに手を組ませて、即席の担架を作り、部長の車まで運ばせた。

もう穴があつたら入りたかった．．．。皆とても重そうな顔をしてた．．．。明日から会社に行きたくない気持ちだった．．．。

恥ずかしい．．．。凄く恥ずかしい．．．。消えてしまいたい．．．。

こう言う時に思う．．．。もっと痩せておけば良かった．．．。もし痩せて華奢だったら．．．。こんな4人がかりで運ばれたりなんてないよね．．．。

ふと思い浮かぶ．．．。男性4人に運ばれるゾウアザラシ．．．。  
今の私．．．。

ドラマの華奢なヒロインだったらヒーローにお姫様抱っこされて．．．。  
。 凄く絵になるよね．．．。

なんか．．．。

有里花と麻美から『ツィエル万屋』って呼ばれるよりも、今日が一番凹んだ気持ちでした。  
どっぷり落ちこんだ。

．．．．．今の自分の状況を打破しなくては．．．。  
ゾウアザラシからせめて、トドぐらいにはなろう．．．。  
宙美は固い決心をするのであった。

(第5話に続く)

**第4話 最悪のハプニングとツイエルの憂鬱（後書き）**

（作者より・・・）

私自身も宙美と一緒に、決心します。（汗）



## 第5話 尾崎部長と2人だけの時間

ガタイの良い若手男子社員4人が汗水垂らし、『ゼイゼイ』『ヒーハー』言いながら、ゾウアザラシを地下駐車場まで搬入．．．。つて感じで、尾崎部長の車の前まで宙美を運んだ。しかも、荷物運搬用のエレベーター利用で．．．自分が大型冷蔵庫になったような気持ちがあった。

「あの．．．もう歩けますから」

「いや．．．頭を強く打ってるかもしれないし、無理はしない方がいい」

「本当に大丈夫ですから．．．」

「いいから、言う事を聞きなさい」  
尾崎部長とこんなやり取りが何度も繰り返され．．．。やっと部長の車の前に到着した。

．．．．車を見てドキツとした。

（うわっ！！かっこいい．．．。外車のセダンですね．．．。部長の雰囲気ピッタリマッチしてます．．．。）

お岩さんのように目の上が腫れあがった上に、荷物運搬用のエレベーター利用でゾウアザラシの搬入と、人生の中で最悪な出来事のワーストベスト3に入りそうな状況だったが、部長の車に乗せてもらえるのは、人生の中で嬉しい出来事のベスト3に入りそう．．．。

「さあ乗って．．．大丈夫かな？」

部長が優しくエスコートしてくれて、宙美は助手席に座らされた。なんだか白馬の王子様に優しくエスコートされ、馬車に乗るお姫様のような気分．．．。

．．．。部長の手がそっと背中に触れた途端現実を引き戻さ

れ、『ヤバッ!』と思った。服に隠れた背中になった贅肉の所在がばれちゃうつ．．．。

その穴に入りたいような恥ずかしい気持ちとは裏腹に、部長の手が触れた瞬間．．．ビリビリと静電気が起きたような、感電したような時めく気持ちになった。

ドクン．．．ドクン．．．心臓は大きく鼓動を打ち始める．．．。

(こんな夢のような出来事．．．きつともう二度とないと思うから、忘れないように心の中の幸せメモに書き記しておこう．．．。記憶の中の幸福写真館のアルバムに、この一瞬の映像を、残しておこう．．．)

心の中で思うだけなら、許してくれますよね。

ご迷惑になるから、意味深な素振りは見せないように気をつけないと．．．。

だって．．．こんな野暮つたい女から好意を持たれてるなんて知ったら、ゾツとしますよね？

「すみません。失礼します．．．」

車内には部長らしい、素敵な男性の好みそうなとてもセンスのいいカーコロンの香りがホワンとした。

凄い車内が綺麗．．．。子供ばい飾り等は一切置かれてないスッキリスマートな感じの車内．．．。

シートは革張りですか？この座り心地の良さ．．．。ゴージャスです．．．。

子供の物とか、奥さんの物とか．．．所帯臭いような形跡は一切ないから、お子さんはいらっしやらないのかな？休日の奥様とのドライブデートは、別の車でお出掛けするのですか？あれやこれやついつい詮索してしまう．．．。

嫌だなあ私って．．．。すっかりおばさんモードスイッチが入ってるじゃない。

宙美が助手席に乗り込んだのを見届けてから、丁寧に扉を閉めてくれて、尾崎部長も運転席に乗り込んだ。  
高級者独特の重厚感ある扉の閉まる音がした。

「ちよつと見せてごらん」

車のエンジンをかけてさあ発進かと思いきや、真剣な顔で、宙美の目の上の怪我の具合を見る為に、顔を近づけて来た。

うわっ．．．顔近いです．．．まつ毛長いです．．．瞳が澄んでいて大きくて、目が切れ長で美しすぎます．．．眩しすぎる．．．唇がセクシーです．．．そんな見つめないでえええええ．．．。

宙美は必死になって、時めく気持ちを理性で押さえ込んで蓋をした。

「うーん。かなり腫れているね。医療設備の整った大きな病院で見てもらった方が良いね。すぐに検査して貰えるし」

「そんなあ．．．ただの打ち身ですよ。病院に行かなくても、冷やしておけば明日には腫れも治まってるような気もしますが．．．」

「いやいや．．．油断してはいけないよ。女の子だし痕に残ったら大変だし、目の近くだし、万が一って事もあるからね．．．という事で、総合病院に行こう」

「はあ．．．部長も色々お忙しいと思いますし、紛失した図面も探さなくてはいけないし．．．こんな時にご面倒おかけして、本当に申し訳ありません」

宙美は、皆の足手まといになってしまったと酷く凹んだ。

「篠崎さんのせいじゃないし、あんな所にファイルを山積みにした

者が悪いんだから、そんな落ち込まなくていいんだよ。図面は、設計部に保管の資料から読み取れるし、関係他部署にも資料が行ってるはずだし、なんとかなるよ。ただ、外部に漏れてないか心配でちよつと搜索してみただけだから。資料がどこに消えたのか、ハッキリさせないといけないけれど、とり合えず資料掻き集めて急いでC A Dのデータを完成させておかないとね．．．」

「あの．．．。人手が足りない時は、お手伝いしますので．．．」

「ありがとう．．．。とても助かるよ」

「はい」

キラリと笑った尾崎部長の優しい笑顔が素敵だった．．．。

こんな素敵な人の奥さんがうらやましいなあ．．．。まあ、私には全くご縁のない事だから、今日で最初で最後の部長と2人だけの病院までの短いドライブを楽しもう．．．。

\* \* \* \* \*

病院で見てもらった結果、怪我は眼球や骨や内部には異常は無く、お薬を貰い、数日後にまた病院に来てくれと言われたぐらいで済んだ。  
思ったよりも病院は混んでて、病院から帰る頃にはすっかり日は落ちていた。

「こんな時間まで、付き添っていただきまして、本当にすみませんでした」

「気にしないで。打撲だけで済んで良かったよ。あとは早く治ると

いいね」

「ありがとうございます」

「そうそう……。篠崎さんも私も直帰にして貰ったから、送るよ。家は何処なの？」

「えっ?! 怪我也大した事無かったですし、このままバスで帰れますので……」

「遠慮しなくていいから。ここまで面倒見させてもらったんだから、最後まで面倒見るよ」

「はあ……。何から何まで……。ありがとうございます。家は花籠公園駅の近くなんですが……」

「えっ? 私もそうなんだが……」

「ええっ?!」

「私は駅すぐ側の、ロイヤリティー花籠マンションに住んでるんだが……」

「えええっ。私の家はそのマンションから見下ろせる、住宅地の一角に住んでいます」

「へえ……。奇遇だね。最近あのマンションを購入してね、引越して来て間もないんだが……」

「まあ……。そうですね。私は幼い頃からずっとそこに住んでま

す」

「じゃあ、住人の先輩だね。色々地域情報とか教えて貰おうかな？」

「あ．．．はい。分からない事がありましたら、何でも聞いて下さい」

きつとご結婚されたばかりで、奥さんとの新居に購入したのね。

ご近所と言うのは嬉しいけれど、ちよつとなんかやだな．．．と思つた。

だつて、ご近所つて事は、スーパーとか地元のお店でパツタリとお会いする事だつてあると思うし．．．。奥さんと仲睦まじい姿を目撃する事だつてあるだろうし．．．。いずれはお子さんも生まれて．．．。お幸せそうなファミリーの姿を目撃する事もあるだろうし．．．。何か見たくないなと思つた。

心の狭い女だな私．．．。嫌だなつて思つた自分が嫌いになつた．．．。

「じゃあ行こうか．．．」

相変わらず爽かな尾崎部長の笑顔。

帰り道、尾崎部長の車の助手席に座つたら、何となく自分が少しシートに馴染んだような感じがした。

自分の席のような．．．ちよつとそんな錯覚のような気分になつた。変なの．．．。私．．．。

ほんの僅かな時間乗せて貰つただけなのに．．．。

いいな．．．。尾崎部長の奥さんつて．．．。凄く幸せなのだろうな．．．。奥さんが、雲の上のような世界の人にも思えた。

病院の待ち合い室で話して待つている時間．．．一緒に車に乗つてる時間．．．。

今日は、尾崎部長と2人だけの時間が沢山．．．。もう二度とこん

な時間やこんな日は来ないと思うから、帰り道の時間、楽しもう・  
・。心に留めておこう・。・。

(第6話に続く)

## 第6話 コミュニティーセンターで

「ここが篠崎さんの家なんだ．．．。本当に私の住んでいるマンションと目と鼻の先ぐらいのご近所さんだね」

宙美の家の前まで送って貰い、門の前で車を止めてから、興味津津な感じで、部長が好奇心旺盛な表情をして繁々と見た。

「真っ暗だけど、お家の人は不在なのかな？」

「あの．．．。両親は亡くなって、今は一人で住んでいます」

両親は宙美が21歳の時に事故で他界したので、今は一人暮らしだ。

「えっ！！そうなんだ．．．」

少し同情するような、余計な事を聞いてしまったような申し訳ないような表情をした。

尾崎部長、そんな顔をしなくても大丈夫ですよ的なオーラを発しながら、何気なく2階のサンルームをチラと見て、宙美は『ヒエッ！！』と思った．．．。

二階のベランダの端にあるサンルームに、いつも洗濯物を干しているが、いつもはレースのカーテンを引いて、外から見えないように気を配っているが、今朝は少し寝坊してしまっただけで慌てていたので、カーテンを引くのを忘れて、洗濯物が丸見えだった！！

一応、バスタオルを手前にして隠しながら干してるのだが、チラリと私のデカパンがあああっ。

今度は二階には目をやらないでオーラを発した。冷や汗が噴き出すような気持ちだ。

辺りは暗いので、気付かないとは思っけど．．．。街頭の明かりがよい感じに当たって、見えなくもない！！



「じゃあ1人で？」

「は．．．はい」

宙美の家は、宙美の父が購入した頃は地価もかなり安く、土地の広さは、この辺りでは広い方の120坪。

道路から1m土地が上がっているので、道路側からの視線は気にしなくてもいいし、東南の角地で日当たりも良好だ。

庭では、広い土地を利用して、色々な果樹を植えたり、家庭菜園もやっているし、小さな温室もあって、ハーブや花も育ててる。お花好きな父の影響で、宙美もガーデニング好きだ。

建物は淡いベージュのモルタル壁に、今の様に個性的な素敵な家とは違い、特徴のない在り来たりな小さな2階建ての古式ゆかしい日本家屋。25年という年月が経っている家なので、それなりに痛んで、それなりの雰囲気だ。

そろそろ塗り替えなければと思いつながら、そのままにしてしまった。塀は昔風のただ積んだだけの、剥き出しのブロック塀に味気ない黒の格子状のフェンスが所々はまっている。

幼い頃から住んでいるので、全体的にはとても年季の入った雰囲気

。今風のお洒落な素敵な家ならいいけれど．．．ちょっと恥ずかしかった。

おまけに広い庭で放し飼いで飼っている雑種駄犬のゴン太が、門近くのブロック塀の隙間から顔をのぞかせ、家の前に止まった部長の車を怪しがって歯を剥いて『ギャンギャン』吠えてるし．．．。ゴン太の不細工顔が余計不細工になっている。

少し沈黙状態になった．．．。

その後、ドキリ．．．部長の口が開いて何か言いかけた感じがしたけど、気のせい？

「じゃあ戸締まりとか十分気をつけてね！お大事に．．．早く治るといいネ」

うっ！やっぱり気のせいね。車から早く降りてくれと言っやんわりとした催促だよ．．．。

宙美は慌ててシートベルトを外して、車から降りてから丁寧にドアを閉め、挨拶の為に運転席側に回った。それに反応して、尾崎部長が車の窓を空けた。

「今日は本当にありがとうございました。あの．．．家まで送っていただいて、すみませんでした。色々お世話になりました」  
恐縮至極状態で、何度も何度もペコペコと頭を下げた。

「気にしないで！　おやすみ」

「おやすみなさい」

最後に深々と頭を下げた。

部長は手を上げて合図を送ってから、車を発進させ、そびえ立つお洒落で豪華なマンションの方に消えて行った。

宙美は、部長の車が見えなくなるまで家の門の前に佇んで、見送った。

車が見えなくなったら『はあ．．．っ』自然と溜息が出た。

尾崎部長はカッコいいなあ．．．知れば知るほど．．．一緒にいる時間が多ければ多いほど、引き込まれてしまう。

家に戻ってから、洗面所の鏡に自分の姿を映して見た。

決してブスではないけれど．．．目も大きくてくつきり二重でまつ毛だっという感じに長いし、見ようによっては、大人しめの可愛い系の顔だと思っけれど．．．太っつてまあいい輪郭の顔。

太っつて、ダサめの服しか着れないし、今まで自分を諦めたような

所があつて、お洒落にも無頓着だつた．．．。  
今日は目の上が腫れて、大きな絆創膏を貼つてるし、見れない姿が益々見れない感じ．．．。  
こんな姿を尾崎部長に晒していたのかと思うと、胸がキューツと締めつけられる気持ちになつた。  
その後にはポロポロと涙が自然に溢れてきた。

「どうしよう．．．。すごく好きになつちやつた．．．。」  
鏡に向つて、戸惑う自分の気持ちを言葉に表した。  
暫く泣いてから、グーツとお腹に力を入れて、鏡の自分に言い聞かせるように言つた。

「宙美駄目よ好きになつちやつた．．．ご結婚されてる人なんだから．．．。  
私の事なんて何とも思つてないし、自分が傷つくだけなんだからね」

部長の事は、気持ち的に他の人よりも距離を置く様にしよう．．．。  
今なら大丈夫．．．好きにならないように気をつけるんだ。  
既婚者を好きになるなんて．．．バカだわ．．．。

そつだ．．．。もつと自分を磨いて、自分に見合つ人を好きになつて、恋人を作ろう。

自分をもつと磨いて．．．。

宙美は鏡に向つて、『よしっ！！』とガッツポーズをした。

\* \* \* \* \*

あれから何か運動をしなければと思い、近くのコミュニティーセンターのサークルで、エアロビクスの会に入会した。

先生は、近所の住民であり、ボランティアでエアロビの先生経験者の人が指導してくれて、会費は月¥3000と破格のお値段。

毎週土曜日の午前中がエアロビの日。

メンバーは、若い子もいれば、ご近所の奥様や、ご年配のご婦人、

中には男性の姿もちらほら・・・。

サークルなので、ラフなTシャツにジャージパンツの長やショート丈の様な姿で、ビキニ風とかコマネチ風の本格的なエアロビウエアの人はいない。宙美も、ジャージ長パンにTシャツで参加した。準備するものは、エアロビ用のシューズと、ストレッチ運動用のダンベルと縄跳びのような形の伸縮性のあるチューブ、それに、床運動用マット。

コミュニケーションセンターは家から歩いて行ける距離なので、大きめのトートバッグにエアロビグッズを入れて、運動も兼ねて歩きで通う事にした。

コミュニケーションセンター内の広い体育館の半面が、エアロビクスのサークル、もう半面がバスケットボールのサークルが使用で、大きなカーテンのようなネットを引いて、区切って使用。

それぞれのサークルの様子はネット越しに見える状況だ。

初めはエアロビの速い動きについていけず、阿波踊り状態で、自分の音感と鈍感さに酷く落ち込んだが、見様見まねで少しづつ、ついていける様になった。

何よりも、音楽に合わせて体を動かす事の楽しさが分かって来るようになった。

殆どついていけない状態でも、結構な運動量で、体が火照り汗が吹き出すようになってくる。

長く続けている人は、ウツトリするぐらい切れのいい動きで、体も締まっていて羨ましい気持ちになる。

いつかああなりたいな・・・。筋肉質でもなく程よい感じの体の締めり方。

痩せたらあのお店のお店のあの服が着たい！！色々夢が膨らんでいく。

音楽に合わせてダンスの後は、ストレッチ運動タイム・・・。

ダンベルを持って筋力UPトレーニングは、腕の筋肉がプルプルするぐらい疲れる。

次はマットを広げて運動．．．。

宙美は、始めたばかりのペーパーなので、半面ずつ区切られているネットすぐ側の床にマットを広げ、習ったヨガポーズの蓮のポーズをとる為に、懸命に足を組んで座った。

太ってて足が太いので、こ．．．このポーズはキツイ．．．。

バランスを崩して仰向けにコロんと転がって、ネットの向こうのバスケットボールサークルに何気に目がいって、ビビりまくってしまった．．．。

そこには知っている人が居た。

『うそ〜！！！尾崎部長だ！！！』

うわっ！！やばい！！

宙美は慌てて、フード付のジャンパーを羽織って、フードを頭からスッポリ被って、見付からない様に体を小さく縮めた。

(第7話に続く)

第6話 コミュニティーセンターで（後書き）

私もエアロビ習ってました。（爆）

## 第7話 今世紀最大のピンチ?!

フードをかぶって小さくなりながら、何気に部長の姿を目で追いかけていた。

いつもスーツ姿の尾崎部長。ランニングにシヨートのトレーニングパンツ姿はとても新鮮な感じに見える。

ボールを追う姿、シユートする姿・・・どの姿も絵になる感じであつとり見惚れてしまう。

汗で濡れた髪の毛が凄くセクシーな感じ・・・。(うっ・・・私つて何を考えてるんだろう・・・)

いつも会社で見ている部長ではないような・・・。全く別の人にも見えてくる。

多分、会社の誰も知らない尾崎部長の別の一面なんだろうな。

とても若々しく見えるし、足もスリと長く筋肉質で、マッチョすぎない均等のとれたボディ。更に素敵だなと感じた。

奥さんが来てるかなと思っただけど、それらしい人は見当たらなかった。

奥様ってどんな人なんだろうな・・・。

尾崎部長は、バスケに夢中で全くこっちの方は気にもとめない様子で、宙美もホツと一安心し、フード付ジャンパーを脱いで、ストレスチ体操に集中した。

エアロビ終了後、更衣室でシャワーを浴びて着替えた。

今日の出来事は本当に驚いた。今後尾崎部長とニアミスを起こさないかと不安になるけれど、その時はその時で開き直ろうと心に決めた。そうよ・・・。どうせ望みのない片思いなんだから、逆に自分の醜態を晒して、妙な期待や妄想を持たないようにした方がいいんだわ。

近所だからと、シャワーの後は、顔は化粧水と乳液だけ付けたスツピン顔。

セミロングの髪の毛はゴムで1つにまとめ、服はジーパンに、洗いざらしのTシャツ。

鏡に映る自分は、女性を諦めてしまったかのように冴えない姿に見えた。

こう言う手抜きがいけないのかな。同世代ぐらいの子は皆きっちり化粧して、可愛い格好してるよなあ……。ちよつと反省の気持ち。

「ヒロちゃん、ランチいくでしょ？」

宙美は、「ヒロちゃん」又は「ヒロ」と呼ばれている。

エアロビ終了後は、同じサークルの仲良しグループ4人とランチがいつものお決まりコース。

運動した後にランチしてデザートまで食べて……。これじゃあ永久に痩せるなんて事出来ないなと思いつながら、平日はいつも家で1人で味気ない食事をしてるので、皆とワイワイとランチは楽しみでもある。

メンバーは、同じ年の親友であり、幼なじみでもあり、このサークルに誘ってくれた紗絵ちゃん。

紗絵ちゃんの名前は石原紗絵。今は電車で1駅の隣町に住んでいて、小学校からのおつきあいだからかなり長い。明るく快活で、優しくユーモアのセンスも抜群の彼女とは大親友の関係。

元々は、自宅から歩いてスープの冷めない距離に住んでいて、そこは彼女の実家でもある。

紗絵ちゃんのご両親とも顔見知りで、私の事も色々と気にかけてくれる親切で優しいご両親だ。

紗絵ちゃんは4年前に結婚して、隣のマンションに引っ越した。

子供はいない。結婚後なかなか子供が出来ず、夫婦で病院にかかって調べて貰った結果、旦那さんが『精子欠乏症』だと言う事が分かった。自然妊娠の可能性は極めて低いらしい……。



体外受精とか方法はあるようだが、2人で話し合って、そう言う治療は行わず自然に任せ、子供に恵まれなかったらそれはそれで、夫婦2人で支え合って生きていこうと決めたそうだ。

だから結婚しても子供のいない紗絵ちゃんとは、旦那さんがサービス業で土日仕事で家にいないという事もあって、未だに休日一緒に出かけたりと仲良く一緒に行動する事が多い。

その他に、アラサーの主婦組、恵美さんと祥子めぐみ しょうしさん。エアロビの休憩タイムに二言三言話すうちに意気投合・・・すっかり仲良くなつた。

2人は、何と尾崎部長と同じマンションの住人で、高級マンションの奥様っぽいセレブな雰囲気を漂わせてる。

でも明るく好奇心旺盛で、2人で漫才コンビ的なやりとりをして笑わせてくれたり陽気で、お人よしな部分もあり良い人達だ。

それぞれ小学校低学年と幼稚園のお子さんが2人ずついるが、エアロビサークルとランチは唯一の息抜きらしく、その時間帯はマンション内のキッズサークルに子供を預けているそうだ。

キッズサークルでは、色々な催しやイベント、遊びの広場などスタッフが一日面倒を見てくれるそうで、子供達も毎週楽しみにしてるそうだ。子供が家に戻ってくるのは夕方頃だそうで、ランチの後はゆっくりとお買い物にも出掛ける事が出来るそうだ。

「今日も『パンプキン ダンプキン』のランチバイキングにする？」  
一番快活な祥子が嬉しそうに言った。

「うんうん、オッケー」

「はい！そこで・・・」

「はい！いいです」

皆で声を揃えて返事をする。

『パンプキン ダンプキン』は、コミュニティーセンターすぐ近く

にある、お洒落な多国籍料理のバイキングスタイルのレストラン。お値段はドリンクバー付きで1人¥2980と少し高めだが、昼間は特に時間制限を設けてないので、ランチタイムのAM11:00〜PM4:30まで時間を気にせず、食事を楽しみながらおしゃべりを楽しむのには格好の場所だ。料理も美味しくて、特に色々な種類の本格的スイーツが人気。

天井の高い明るいガラス張りの店内に、大理石の床。

イタリアンカフェ風の真っ白なパラソルの付いた席が、とてもいい雰囲気だ。

宙美達は奥の方の窓辺の4人掛けの席に通されて、いつものように2人ずつ交代で食事と飲み物を取りに行つて、全員揃つてからあれこれと話して花が咲く。

この中で唯一独身の宙美の恋愛についての話題で今日は盛り上がった。

「で……。会社に良いなあ〜つてう人は居ないの？」

祥子が、本日のパスタの森のキノコのクリーミーパスタをスプーンとフォークを使ってクルクル巻き取りながら、好奇心旺盛な感じで目を輝かせながら聞いた。

隣では恵美もパンプキンスープをひとくち口に入れてから、嬉しそうに宙美を見つめる。

宙美は万が一の事を思い、回りをキョロキョロと見回して大丈夫な事を確認してから口を開いた。

もし部長とここでも出くわしたらたまつた物ではない。

「実は……。凄く素敵だなんて思う人は居るのですが……。ご結婚されてるので、恋愛対象には除外なのですが……。憧れる気持ちというか、毎日会うのが楽しみというか……。ちょっとドキッと心

が時めく人は居るんですけど．．．」

その言葉を聞いて、3人共一斉にガクツと気落ちしたような素振りを見せた。

「なんなの〜それ．．．。ヒロちゃん駄目よ〜そんな事で喜んでいたら。それに不倫は絶対に駄目よ!!!」

既婚者と聞いて、世話好きなお人好しの恵美が心配そうな顔に変わる。

「分かってます。だから、来週からあえて他の人よりも距離を置く様な気持ちで、接するようになって思ってます。なんか．．．いけないって思いながら、凄く素敵な人で、油断していると心が引き寄せられちゃうって言うか．．．。」

あゝ世の中に、こんな素敵な人が居るんだな〜って、ついつい思っちゃうんですよね」

「ヒロ大丈夫？」

紗絵が心配そうに宙見を見た。

「既婚者に魅かれるだなんて．．．。心配しちゃうよね!! 大丈夫!! キチンとわきまえてるし、不倫には絶対にならないし。第一私モテないし。会社で若い子達には『ツ―エル万屋女』って言われて煙たがられてるし．．．。」

「本当にこう言っちゃなんだけれど、ヒロの社の若い子達は見る目がないって言うか、性格悪いよね」

宙美の事を幼い時から見ていた紗絵は、どうして宙美の良さが分からないんだらうと憤慨するような顔をして言った。

「仕方ないよ．．．自分でも分かってるし．．．。こんな太つて、仕事だつて出来る方じゃないし．．．。」

「そんな事ないよ！！ 中学高校の時は、男子からヒロは可愛いって人気が高かつたんだからね。それに気が利いて、人の嫌がる事でも率先してやる子だったし」

「紗絵ありがと．．．。でも今はこうだもん」

「そうだ．．．。中学高校時代は今の様に太ってる事もなく、確かに何人かの男の子から告白された事もあった。」

「社会人になってから、ある事がきっかけでストレスを溜め込むようになり、気がつけばこんな状況になってしまったのだった。」

「ヒロちゃんは可愛いわよ。とても優しい子だし．．．。結婚したらとてもいい奥さんになれるわよ。私達みたいな不良主婦にはならないわね」

祥子が恵美と目を合わせて、首をすくめて笑い合う。

「そうそう．．．。きっと近いうちに素敵な人と出会えると思うわよ。で．．．その憧れの人ってどんな人なの？」

「実は．．．会社の上司と言うか．．．。人事異動で新しく部長として私の課に配属されてきた人で．．．。年は30歳で．．．。」

宙美は尾崎部長の事を思い浮かべながら目を輝かせて、話した。

「なんか既婚者で部長だと聞いた瞬間凄い年寄なのかと思ったけれど、若い部長さんなのね。おまけに近所に住んでいるだなんてかなり危険だわ．．．。変な妄想とか憧れとかそう言う気持ちはスツパリと捨てて．．．。無理矢理でもいいから恋人を作った方がいいわよ」

恵美が心配顔で、宙美を諭すように言った。  
やはり、既婚者に恋心を抱いて、しかもかなり近所に住んでいると  
なると、心配でたまらない。

「そうだ．．．。旦那の会社の友人に良い人が居るから、紹介しよ  
うか？」

親友が間違った方向に行かない様に、自分が一肌脱がなきゃと、紗  
絵が名案とばかりに、紹介話を持ちかけた。

「そつか．．．。紗絵のご主人の会社は殆ど男性社員で占めてるも  
のね。紹介してもらおうかな．．．」

宙美も適齢期を過ぎて、夢見る乙女のように既婚者に現を抜かしてい  
る場合ではないかと、紗絵の提案に乗ろうかなという気持ちが出て  
きた。

「オツケー、旦那に聞いて見るね。独身男性が多いのよ旦那の会社  
って」

本心は、紹介とかあまり気は進まなかつたけれど、この気持ちをど  
うにかしたくて、何か気持ち紛れるようなそんな事があつたらと  
思った。でもなんだか気持ちスツキリしない気分もする。

「私．．．ソフトドリンクを飲みすぎちゃつたから、ちよつとお手  
洗いに行つてくるね」

ちよつと気分転換にと、急に意味もなく化粧室に行きたい気分にな  
つてきた。

「うん」

化粧室に行つて戻つて来て凍りついた．．．。

丁度、宙美達の席の裏手は木のパーテーションと大きな観葉植物が

並んでいて、それが壁のようになって、ちょっとボックス席のように落ち着き感があるが、その為に残りの席が全く見えなかった。そこに．．．そこに．．．尾崎部長がバスケの仲間達5人と座っていた。

今、尾崎部長が座っている真後ろ辺りが、私の座っていた席だ。距離にしたら3メートルぐらい？いや．．．2メートル少し？会話が丸聞こえではなかっただろうか？

尾崎部長の名前は出さなかったから、一緒にいる仲間の人達には気がつかれなかったと思うが、もしあの話しが聞えていたら、本人は明らかに自分の事だと分かるだろう。

しかも．．．化粧室から戻って来た宙美を目で追って、尾崎部長がニコリと微笑んで軽く会釈した。

見ようによつては意味深な．．．今の会話聞えましたよ的な雰囲気にも見える。部長の謎の微笑み？！（苦笑かも？）

ノーメイク、ジーパンに、すり切れたTシャツに、引つ詰めヘア―で．．．。

部長に胸キュンだなんてバ・レ・た？

宙見はスーッと目の前が暗くなつて行くような気がした。

ど．．．ど．．．どうしよう．．．どうすればいいのぉ〜!!!  
今世紀最大のピンチがやって来た。

（第8話に続く）

## 第8話 地獄から天国？そして・・・

尾崎部長の謎の微笑みに、足は止まり怯んでしまった。どんな顔を  
しているのかも分からない・・・。

この状況を、どう躲せばいいのか？頭の中は真っ白になって、パニ  
ック状態。

宙美しっかりするのよ!!!

何とか気持ちを落ち着かせて、若干驚いた表情をしながら、遠巻き  
に会釈して、慌てて席に戻った。

何？今の私の態度・・・。凄く幼稚じゃなかった？

まるで、学校帰りに寄り道して茶店でダベリングしてる所を、学校  
の先生に見付かって、シユンとする学生の図だったかもしれない・・・。

『はあくっ』心の中で深い溜息を漏らした。  
席に戻って来てから、皆に携帯を指差して、慌ててメールを送信し  
た。

皆・・・warning!!

真後ろの席に、例の部長さんがいた!!  
話聞かれたかも!!

皆が一斉に、慌てて送信したメールを読んで、驚きの表情に変わる  
・・・。  
なのに気になるらしい・・・。

「ちょっと私、お手洗いに行くね」

「私、ドリンク取ってくるね」

「私、デザート取りに行ってくる」

3人それぞれ声を揃えるように言うと、一斉に席を立ち上がり散りに離れた。

目的は分かっている。部長さんの事が気になるのね。(泣)

だって皆ちろちろ後ろの席を見るんだもの。凄く白々しく見えるんですけど。ああ．．．恥ずかしいよ。

1人席に取り残され、氷が殆ど溶けて温くなったアイスティーを、無意味にストローでクルクルかき混ぜながら、うな垂れた。思わず『ハアーツ』と深い溜息が漏れた。

「．．．．さん」

そんな時に、自分の名前を呼ぶ声が聞えた。

「え？」

「篠崎さん」

ハッ！と思って声のする方を見たら、コットンパンツにポロシャツ姿が眩しい尾崎部長が微笑みながら立っていた。

「は．．．はい?!」

極度の緊張で、思わず席を立ち上がった。

「あの．．．。私は、既婚者じゃなくて独身なので．．．もしかしてこの指輪でそう思ったのかな？これは父の形見なんだ」

そう言っつて、指輪を嵌めてる手を宙美に見せた。

厚手のがつちりした、かまぼこ型のシルバリング。そう言えば、レトロな雰囲気の凄く古いデザインの指輪だ．．．。

「ごめん。盗み聞きするつもりじゃなかったんだけど、会話が聞えてしまっつてね。嬉しく思ったし、全然気にしなくて大丈夫だからね」



「は．．．お気遣いありがとうございます。本当に．．．すみません。あの．．．聞き流して下さい。決してご迷惑おかけするような態度はとらない様にしますし．．．。本当に．．．。あの．．．」  
パニックを起しながら、何度もペコペコと頭を下げて、お詫びした。気を使ってそんな事言っただけ、私のような者に好かれて思われてるだなんて．．．。気持ち悪いですね。  
ああ．．．。どうすればいいんだろう。

「ははは．．．。いや、迷惑だなんて思ってないし、そんなに気に病む事はないからね」

「はい．．．」  
なんて思いやりに溢れた温かいお言葉だろう。

「逆に光栄に思うというか、嬉しいと言うか」

「は？」

「今度、食事でもいかがかな？」

照れ顔で尾崎部長の顔が、うつすらと赤く染まっている様にも見える。気のせい？

「えっ？」

『う．．．そ．．．』 心の中で呟いた。

「今度、ご一緒にお食事にもいかがですか？」

聞き間違いかなとも思ったら、ニコニコ微笑みながら、もう一度言われた。

自分の目が、放心状態で点になってるのがわかる。

予想外の事が起きて、真っ白になって固まってしまった。

私の頭の中のコンピュータが、ピーピー警告音をあげて、warning!! disk full!! warning!! と頻りにメッセージを掲げてる。プシューっと耳の穴から煙が上がってしまいそんな危険な状況。

瞬間沈黙してから、『宙美チャンスよ!!』何処からともなく天の声が聞えた。

そくだ．．このチャンスを逃しては駄目よ!!

僅かに残っていた自分の冷静な部分が、脳の指令を待たずに身勝手に動いてるような感覚で答えていたと思う。

「はい．．．」

そして、時間差のように、その答えに対して、宙美の全部分が拍手大喝采した。

良くやった!! ナイスアンサー!!

「電話番号は社内名簿でわかるね? じゃあ、連絡するから、是非行きましょう」

「はい．．．」

『はい』しか答えられなかった。それがやっと．．．。

ヘナヘナと席に座り込んで、その後何をしていたのか何だかあまり覚えてなかった。

その後すぐ、尾崎部長はバスケの仲間達と席を立って、帰って行かれた。

尾崎部長が去った後、何があったのだろうと、紗絵達3人が慌てて舞い戻ってきて、後は質問攻めと、『おめでとう!!』『ヤツタネ!!』の祝福コール。

神様．．これは本当の事ですか? 現実の事ですか?

尾崎部長の車の助手席が、本当に私の指定席に？  
いやいや．．．。

ただ食事に誘われただけよ．．．社交辞令の挨拶かもしれない。  
ツイーエルのダサイ私が、とても信じられない。

好意を持たれて、一度ぐらいは食事に付き合っただけよと、そんなノリなんだわきつと．．．。

その後、更に不安な事が耳に飛び込んできた。

部長と同じマンション住人でもある、祥子さんと恵美さんが、尾崎部長の住まいをこっそり調べたそう。

尾崎部長はマンション最上階でもある12階に住んでおり、広いカーペット付の4LDKに住んでいるそうで、マンションの中でもいいグレードのタイプらしい。

2人して12階の様子を見に行ったら、尾崎部長の家から、5歳ぐらいの男子と若い女性が出てきたそう。

鍵をかけていたから、住人に間違いないらしい。

一体どういう事？

あの優しそうな誠実そうな、尾崎部長が独身だなんて嘘をついている様にも思えない．．．。  
でも．．．。

(第9話 続く)



## 第9話 尾崎部長の秘密

あれからとても気になってしまい、もう一度祥子さんに電話して、尾崎部長の事を詳しく聞いてみた。

祥子さんと恵美さんが尾崎部長の家から出てきた女性を目撃した時間帯は、午後の2時頃で、晩ご飯のお買い物に行くような雰囲気でもカジュアルな装いだったそう。

玄関を出たらシヨルダーバッグから女性の好みそうなストラップ付きの鍵を出して、戸締まりしていたから、住人に間違いない様子らしい。

その女性は、尾崎部長と同年齢ぐらいのとても綺麗な人だったそう。一緒に連れてきている5歳くらいの男の子は、その女性を『ママ』と呼んでいた。その人の子供に間違いないらしい。

そしてその子は、少し天然がかかった柔らかな髪の毛、目のクリッとした凄く可愛らしい子だったそう。少し尾崎部長に似てる雰囲気だったそう。

尾崎部長の髪の毛も少し天然がかかった柔らかそうな髪の毛……。やはりお子さんだと思えない。

その後、マンション住民全員による恒例行事、年数回の休日の周辺清掃奉仕作業『クリーン運動』の時に、エプロン姿で尾崎部長と一緒に参加していたそう。

他の住民が、『奥さん』と声をかけていたらしい。

それって決定的な事じゃないですか！奥様がいらしたのですか？そして可愛いお子様も……。

……なんか凄くショックだった。

何で独身だなんて嘘をついたのですか？

尾崎部長の事が信じられなくなりました……。

だから．．．やっぱりあまり関わらない様に線を引いて、距離をおこう．．．。

もう憧れたり、夢見たり．．．乙女のようなそんな甘い感情は捨てることにします。

．．．．．やっぱり好きになっではいけない人なんだ。

そんなある日、新商品開発機種の試作が集中して、部品の発注、在庫管理等の仕事が集中してしまい、久しぶりの残業となってしまう。今日中に片付けておかないと、明日はまた新しい機種の仕事が沢山入って来る予定で、少し余裕で期日に間に合わせて置かないと、他の部所に遅れを生じる危険もあった。

本来ならば今日はノー残業デーだが、特例でやむおえない場合は残業も可とされている。

他の人は定時で退社したが宙美は、嫌だなと思っただけれど広いフロアで尾崎部長と2人つきり残業となってしまうた。

（嫌だなあ．．．。何事もなかったような、あっさりした態度で居よう。私の癖でもあるモジモジは駄目よ！！堂々としていよう。そして自分の視界から消去して、部長は居ないって思う事にしよう．．．。よしっ！！）

パソコンの画面に食い入る様に見つめ、必死にキーボードを叩いた。節電の為にライトを落とした薄暗い広いフロアはシーンとして、宙美の必死に叩くキーボードの音しか聞えて来ない感じだ。

時々尾崎部長の書類をめくる微かな音の気配を感じるが．．．。そして何となく視線のようなものも感じるような．．．。でも、絶対に見ない事にした。必要最低限の会話しかしたくない！！細かい仕事、集中しないと僅かな間違いがとんでもない事になる。気が反れないように、集中力を高め、間違えないように細心の注意を払った。

更に、データ入力中に分かったが、設計部の若手社員担当機種のデ

ーターに、部品番号のミスがかなりある事が判明した。  
この部品は廃番で、すでに使われてない部品だ。

入力する事にエラーメッセージが出て来る。

データを提出した本人はすでに退社。担当本人に確認するのが一番だが居ないし、連絡も取れず・・・。

本当なら彼のミスでこちら側には全く非も無く、そのまま突き返してもいいが、この事であらゆる部所に遅れが生じ、全体にも影響が出てくる。

まだ不慣れな中、初めて任された大きな仕事かもしれない。

やっとの事で仕上げで慌てて書類を持ってきた雰囲気も見受けられた。

忙しい中、先輩や上司ももっと複雑で大きな仕事を抱え、目が行き届かずについ後回しにされ、こんなミスが生じたようにも思える。

CAD経験者で図面の見方も熟知しているので、宙美なら部品対応表を見て、調べ直し、正しく修正し直す事が可能だった。

1時間ぐらい残業延長になりそうだが・・・。他の仕事はほぼ片付いているので、自分がやらなければ・・・。

正しく修正して、明日日本人にそれとなく連絡しておこう。

宙美は慌てて設計部資料室にかけて行き、この機種の資料を集め、抱えて持ってきた。

宙美の慌てた様子を見て、尾崎部長が何か不手際があったのだと気がついた。

「篠崎さん、どうした？」

こう言う時には、部長の事を意識している感情も消え、仕事モードスイッチ全開だ。

「あ、はい、この機種に使用されている部品ですが、廃盤部品が使用されてまして・・・」

「どれ、見せてもらん」

図面を一目見て、尾崎部長が顔をしかめた。

「これは。とんでもない間違いだね。よし、じゃあ私が、正しい部品番号を言うから、入力してくれるかな？」

「はい」

技術的な知識も豊富な尾崎部長に確認して貰ったお陰で、あっという間に片付いた。

休日のバスケ姿の部長も素敵だったけれど、ピシッとネクタイを締めて真剣な表情で仕事の出来る部長も素敵だと、ふうっと思った。

「良く気がついたね。流石篠崎さんだ!!ご苦労様」

宙美を見て、にっこりと笑う笑顔が眩しかった。。。心臓が跳ね上がるようなそんな感じがした。

「あ。。。いいえ。部長のお陰で、短時間で仕事を終える事が出来ました。ありがとうございました」

「いやいや。篠崎さんが気付いてくれなかったら、この機種の試作納期が遅れる事になっていたかもしれないし、本当に助かったよ。彼には私からそれとなく言っておくよ。やんわりとね」

「ありがとうございます」

ああ。。。本当に素敵だな、尾崎部長には完敗ですという気持ちになった。

こんな誠実な人が、奥様がいらっしやる事を。。。お子さんがいらっしやる事を。。。どうして隠したのかな？

何かとても奥深い事情でもあるのかな？

\* \* \* \* \*



仕事を終え、帰りの電車に乗ろうと駅に向う。会社から駅まで徒歩で5分。

駅に着いたら、ちょうど電車が時間調整の為に5分停車中で、余裕で乗る事が出来た。(ラッキー！)

電車の発車時間は22時05分。

遅い時間だからなのか、乗っている人もまばらで、電車が発車したら、閑散としている為か車内がスースーして少し肌寒い。

電車で35分で宙美の降りる『花籠公園駅』だ。

何気なく電車の吊り広告を見て、あれこれ妄想にふける。

『コンビニの期間限定初夏のスイーツ。ブランマンジエ...美味しそう...和風白玉抹茶入りのがいいな。駅に着いたらコンビニで買おうかな。そうだ...今日は、ついでお弁当買って、簡単に済ませちゃおう。ああ...お腹空いたなあ』

「ブランマンジエ美味しそうだね」

スツと隣の席に尾崎部長が座って、驚いて目が点になった。

「ぶ...ぶ...部長、何でこの電車に...車じゃないのですか？」

あまりにも突然すぎて驚いてしまって、声も裏返り、どもってしまつた。(あくはずかしいよ)

「ああ...あの時は就任して間もなかったし、取引先に出向いたり外回りが多かったからね。普段は電車通勤だよ。ギリギリこの電車に間に合つて...ふと見たら、篠崎さんが吊り広告のブランマンジエの誘惑に取り込まれそうになつてたから、ちょっと声でもかけてみようかなと思つてね」

(恥ずかしい)

吊り広告のスイーツに心奪われて、ヨダレ垂らさんとする雰囲気を目をハートにして見てる自分の姿を想像して、このまま走り去って消えなくなる気持ちになった。

「お腹が空く時間だね。良かったら駅前のファミレスと一緒に食事でもどうかかな？」

「え？でも、お家で奥様が食事を用意して待たれてるのでは？」  
「うっかりポロツと思ってる事を口に出してしまって、『しまった』と思った。」

これじゃあ尾崎部長の家近辺を探って知ってますって白状してるよ  
うなものじゃない！！

「あ．．．すみません。実は尾崎部長と同じマンションに住んでいるお友達がおりまして、奥様とお子さんがいらっしやるって聞いてしまったので．．．」

もっと柔らかな方がいい方があったと思うが、焦って冷静さを失って、ストレートに言ってしまった。

「そうなんだ。別にそんな恐縮する事ないよ。私は真正正銘の独身です。お友達が目撃したのは多分、私の姉で子供は甥っ子だと思うよ」

「えっ？」

その言葉に、心の中にあつた重苦しい重い石がフツと消えたような軽い気持ちになった。

「実は姉が今、離婚に向けて話し合っている所なんだけど、姉が離婚話を持ち出した途端に相手が暴力を振るうようになってね、着の身着のまま飛び出してきたような状況で、とり合えず先の見通し

が立つまで俺の所においてあげる事になってね」

「まあ．．．。それは大変でしたね」

「だから、なにも問題は無いし、一緒に食事に行ってくれるかな？」  
そう言つて、ふんわり微笑んだ尾崎部長の素敵な笑顔．．．。  
宙美は眩暈がしそうにクラクラとした。

「は．．．はい」

尾崎部長と一緒に食事?! 極度の空腹状態だけれど、なんだか食事が喉を通らないかも．．．。

ツィエルの私には、部長と2人だけの食事はレベルが高すぎます!!

さっきまでヒンヤリした車内だったのに、隣に尾崎部長が座ったら、回りの空気全体がほっこりと温められた感じがした。  
微かに触れる肩から部長の体温が伝わってくる気がする。  
こんな私ですが．．．。好きになってもいいですか?  
宙美は心の中で呟いた。

(第10話に続く)

## 第10話 一緒にお食事

尾崎部長と一緒に食事……。  
コツチンコチンに緊張して、喉もカラカラになつてゐる状態。  
ご飯が喉を通るかしら？不安になつてくる。

駅前のファミレスに入ると、時間も遅い為か店内はお客もまばらだ。  
ウェイトレスがにこやかな笑顔でやって来て、窓際の長ソファ椅子の4人掛けの席に案内する。

「フルーツ盛りたくさん！デザートフェアか……。美味しそうだね！」

初夏のデザートフェアの特別メニューを手にとって、それを宙美に見せて、尾崎部長が笑顔を向けた。

「あ……。はい。本当に美味しそうですね。部長は甘いものは大丈夫なのですか？」

そのメニューは本当に、どれも美味しそうで、フルーツをたっぷり使つて、サッパリとヘルシーで美味しそうだ。

甘いもの好きの宙美は、つついハートを奪われそうになる。

「実は甘いもの、結構好きなんだ。美味しそうだし、食後に一緒に食べようか？」

チヨット少年ばい笑顔を向けられると、心が跳ねる！  
部長……。その笑顔反則ですよ！！だけど……。

「あ……。はい！」

花より団子？ ついついその誘惑の言葉に飛びついてしまう。

何処が食事が喉を通らないんだ……。私。（泣）

そうよ．．．。猫かぶつてもしょうがないし、地のままで行こう。  
その方が気持ち楽だわ。変な期待しない為にも、ありのままの自分を出そう。

そう思ったら、緊張感も解け、気持ちが軽くなって来た。

「お腹が空いたね」

「はい！流石にこの時間はお腹が空きます。途中で餓死しちゃうんじゃないかってちょっと眩暈が起きそうになりました」

「餓死しそうだった？」

尾崎部長が嬉しそうに微笑む。

「はい。何だかついつい食べ物物の広告に目が行ってしまって．．．  
そう言いながら、私、地雷踏んだ？とちょっと思う。」

「実は俺も。あ．．．ゴメン。会社ではビジネスモード”私”って言ってるけど、普段はこんな感じなので．．．。ここでは上司と部下じゃなくて、肩の力を抜いて、気楽な雰囲気でご近所さんモードで、和気あいあいと食事するのはどうかな？」

「えっ？」

「会社の上司と食事と言うのも、仕事の延長のような気分が抜けなくて、落ち着いて食べた気がしないと云うか．．．くつろげない雰囲気だよ。だから会社モードは終りにして、気楽な雰囲気ですごすのを楽しめるのはどうかな？」

「あ．．．はい。じゃあそれで．．．」

そう言いながら宙美は、『会社モードでも、ご近所モードでも、ど

こちらでも変わらないんですけど……』と心の中で呟いた。

「じゃあ、尾崎部長じゃなくて『尾崎さん』でよろしくね。あ……  
。『諭さん』でもいいけど……」  
「ちょっと意地悪そうな茶化すような顔で笑いながら言った。

「ええっ！それは……」  
その言葉にドキリとまた心が跳ねる。

「あははは……。冗談！願望としては名前の方で呼ばれたいけれど、それはちょっと厚かましかったよね。じゃあ部長をつけないで、名字で呼んでもらおうかな？」

「はい」

「じゃあ早速練習。言ってみて」

「あ……。は……。はい」  
ものすごく緊張する。宙美は胸の辺りを手で押さえて、ゴクリと生唾をのみこんで呼吸を整えてばそりと言った。

「尾崎さん……ん」

「ん？聞えないなあ」

意地悪な顔で聞えない素振りの尾崎部長、もとい諭。

「えっ？」

「はい。もう一度……！」

ご近所さんモードと言ったが、こう言う時は部下に注意をするような言い回しだ。

「尾崎さん！」

大きな声でハッキリと呼びかけてみた。  
回りの客がチラとこっちを見た。

「よし！これなら合格」

「その言い方、ちょっとビジネスモード入ってますよ」

「ははは．．．。悪い悪い．．．。篠崎さんってからかい甲斐があると言っか、いじりやすいと言っか．．．可愛いよね」

「もっつ．．．酷いです。いじめっ子ですね、尾崎ぶ．．．尾崎さんって」

「あ．．．。今、部長って言いそうになったね、ご近所モードの時は部長って言ったら、一回につき500円徴収ね！」

「ええーっ！！500円は高いですよ。十分気をつけないと．．．」

2人で笑い合ったあと、端の方でジツとこっちを見ているウェイトレスと目が合い、お互いにオーダーするのを忘れていた事に気がつき、慌ててメニューを広げた。

「さてさて．．．何にしようかな？ 今日はお腹が空きすぎて、ちよつとガツツリな和って気分だから、ポン酢おろしソースかつ膳にしようかな？ ライスは大盛りで、ドリンクバー付きにしよう」

「じゃあ私は、和風ハンバーグセットにします。ドリンクバー付き

ですし」

「よしじゃあ決まりだね？」

注文し終って、お互いにドリンクバーから好みの飲み物を持ってきたら、料理が運ばれて来るまでの間、他愛ない話して盛り上がる。

「そうそう……。コミュニティセンターの近くのレストランでパツタリ出会った時には驚いたよ。あの様子からいくと、何かスポーツでも習ってるの？」

宙美はあの時の事を思い出して、急に顔が火照ってきた。

「は……。はい。実はお友達が誘ってくれて、エアロビのサークルに入ってます」

「エアロビかあ。そう言えば体育館のネット越しの反対側でやってたね」

「はい。実は、尾崎さんがバスケットをやっているのに途中で気がつきました」

「えっ。なら声をかけてくれれば良かったのに……」

「だって、恥ずかしいです。エアロビを習っているのなんて知られたくないって、化粧もしてないしスピン顔で、引っ詰め頭で、とてもお見せ出来ない姿でしたし……。恥ずかしすぎて穴に入って、もう地球の裏側まで逃避したい気分でしたよ」

「そんな事気にしなくてもいいのに……」



「でも、バスケットに夢中で全く気付かれてない様子でしたので、ちよつとホツとしたというか．．．」

「本当に気がつかなかったよ。バスケは学生時代にやっていたのだけれどね、腰を痛めてからやめてしまつてね。」

マンション内の自治会の同じ班の班長さんがバスケットチームのリーダーをやつててね．．．。俺が学生時代バスケをやつてたとうっかり話してしまつたら、バスケットチームの助っ人をどうしても頼まれてしまつてね。」

無理は出来ないから、補欠で短時間参加でもいいのならと条件をつけて、少し渋々で参加したんだけど。」

やり始めると楽しくてついつい夢中になつてしまつてね．．．」

「腰．．．悪いのですか？」

「実は恥ずかしい話し、腰痛持ちでね。篠崎さんが社内で怪我をした時も、カツコよくお姫様抱っこで抱き上げて病院まで連れて行ってあげられたらなと思つただけれど．．．。あの時はチョット惜しい気がしたな」

「そ．．．それは。絶対に無理ですよ！私こんな感じですし．．．そんな．．．。あの時は本当にご迷惑をおかけして、もう恥ずかしくて．．．。恥ずかしくて．．．。家に帰つてからどつぷりと落ち込みました」

「何で落ち込むの！篠崎さんの責任じゃないし、事故に遭つたよくなものじゃない。傷痕が残らなくて本当に良かったよ！心配だったんだ」

「ありがとうございます。そう言つて頂けて嬉しいです。お陰様で

綺麗に治りました。それに病院にご一緒して下さい嬉しかったです。重ね重ねありがとうございます」

「いえいえ……。俺も篠崎さんと一緒にいられて嬉しかったと言  
うか……」

「えっ？」

「正直に言うと、会社で初めて篠崎さんを見た時から、凄く気にな  
る人と言うか、心魅かれたと言うか……。宜しければ、今度一緒  
に出掛けませんか？」

「えっ？」

「デートのお誘いです」

「ええええっ」

「お嫌ですか？」

「そ……そんなことはありません。絶対に……。凄く嬉しいです」  
信じられない。これは夢じゃないよね？うそーっ！！尾崎部長と？  
私が??

心臓はバクバク……。気を静めようと、グラスの水をゴクリと飲ん  
だ。

「じゃあ会社を離れたら、今度からは恋人モードって感じかな？」

その言葉に飲み込んだ水が気管に入り込み、一瞬コップの水で溺死  
しそうな感じに溺れそうになった。

その後、酷く咳き込んでしまった。  
「ええええええーっ！！私……。尾崎部長もとい尾崎さんの恋人？」

(第11話に続く)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7008w/>

---

ツエール万屋（よろずや）女の恋の行方

2011年11月26日23時54分発行